

〔退職記念最終講義〕

私の心理臨床実践と「自己肯定感」

高垣 忠一郎*

1. 子どもや若者の社会や人間関係への不安感情

不登校の子どもや社会的ひきこもりの若者たちは学校や社会、人間関係への不安感情が大きい。彼らは自尊感情が傷つけられることや他者に受け容れられないことへの不安が大きく、学校や社会に出ていくことに臆病になっている。そのような心理状態はどこからくるのだろうか？そこにはどうい問題が潜んでいるのだろうか？

今日の競争的な学校環境や非人間的な労働環境が不安や怖れをもたらしている一面があることは無視できない。彼らが「甘えている」「働く意欲がない」と批判される前に、そのような環境がまず問題にされなければならない。

しかし同時に、彼らの不安や怖れがそうした環境を機械的に反映する主観的反応だとは言い難い面もある。外的環境は内的条件によって媒介され、屈折されて反映される。ゆえに、内的条件の形成や調整に関わる教育や心理臨床の立場にたつて問題をみすえるならば、不安や恐怖を生み出す子どもや若者自身の内面のありよう、その価値観やものの見方、考え方がどうなっており、それがどのように生まれるのかが一方で問われなければならない。そこに教育論、発達論、心理臨床の立場からの問題提起が当然なければならない。

たとえば、発達障害を抱えていてその障害特性から作業効率が悪かったり、人間関係をつくることに困難があったりして、今日の余裕のない学校や職場に適応するのが困難になっている問題や、虐待やいじめを受けて育つたためにトラウマを抱え、きわめて自己評価が低く対人関係に不安や恐怖を抱き、学校や職場、社会に出ていくことに臆病になっている問題や、競争原理に支配された「脅し」による教育、子育てによって独特の内面を形成し、自尊感情が傷つきやすくなっている問題など、子どもや若者たちの主体の側が抱える問題を視野にいった検討と提起がなされなければならない。

筆者がここで問題として提起したいのは、筆者の主として不登校・社会的ひきこもり問題への心理臨床実践からみえてきた今日の子どもや若者たちの人間としての尊厳に関わる問題であり、その内面

* 立命館大学産業社会学部教授，2009年4月より立命館大学大学院応用人間科学研究科特別任用教授

のありようについてである。そしてそれは、先のような個別特殊な諸問題を抱える子どもや若者たちに通底する問題ではないかと考える。

2. 今日の子どもや若者の体験世界と自己肯定感

近年にわかには理解しがたい青少年の犯罪がマスコミをにぎわせている。筆者のようにカウンセリングや心理臨床に関わる人間が、いつも格闘するのが自分とは異なるリアリティの世界（体験世界）に生きる人間を理解することの困難さである。自分があたりまえに生きている世界が相手にとってはあたりまえではない。

なぜ相手は何でもないようにみえることを、それほどに恐れるのだろうか？なぜ、些細なことにみえるのに、パニックを起こすような反応を示すのだろうか？それを理解しようとして相手の生きている状況や生い立ちを探り、どのように相手のリアリティの世界が構成されているのだろうかを模索する。しかしその仕事は暗い深い森を手探りで進むような感を否めない。しかし、そういう作業を抜きにして、彼らの行動や反応を十全に理解することはできないのである。

筆者が30年以上にわたる心理臨床実践のなかで出会ってきた人々のなかには、そのようなすぐには理解しがたい反応や感じ方をする人々が少なくなかった。ここでいう理解しがたいとは、幻聴や妄想、解離現象などの病理現象を指しているわけではない。たとえば、ある若い女性は次のように自分の体験世界を語る。

「暗がりですごい後ろから足音が聞こえてくると自分に危害が加えられるのではないかと命の危険を感じて脅える。あの心理状態に近いのが日常の私の心理状態でないか」「私は人に合わせることをしかできない。人に合わせなくても受け容れてもらえることがあるというのは私にとっては推測でしかなく、私の体験している世界は、合わせないと拒否されて自分がなくなるという恐怖の世界だ」「なぜそういう風に感じるのですかと問われると、すぐに攻撃されているようで不安になる。何か批判されると自分が全部否定されているように感じてしまう」

筆者がカウンセラーとして出会ってきた人々の中には、この女性のような感じ方をしながら「安心できない脅威の世界」を生きている人々がたくさんいた。不登校の子どもや社会的ひきこもりの若者のなかにも似たような感じ方をし、似たような世界に生きている人々が少なくなかった。この人たちの表現するこういう「感じ」を言葉にすれば「自分が自分であって大丈夫」という安心感を欠く世界のように筆者には感じられ、その「自分が自分であって大丈夫」という感覚のことを筆者は「自己肯定感」と呼んできたのである。

そして、筆者のごく限られた心理臨床実践の世界からみえてきたものであるが、この自己肯定感という概念を切り口にして、今の子どもや若者たちの問題を見るときに、その問題の本質と子どもや若者たちの置かれた状況がよくみえてくるように思われた。カウンセリング論や心理臨床論の授業のなかで、こうした感じ方や体験世界の話をする、わがことのようにそれを受け止める学生諸君も少なくなかったのである。

3. 不登校・社会的ひきこもりにかかわる心理臨床から

不登校や社会的ひきこもりという状態そのものが学校や社会への参加を困難にし、子どもや若者たちから学習や労働、人間関係の構築などの機会を奪い、人間発達や自立への道程にハンディをもたらすという問題がある。しかし、援助者の視点からすればその問題解決の途上に大きく立ちふさがる問題がある。それは当事者の子どもや若者がそういう状態から立ち直っていく主体になるうえでの大きな困難を抱えるという問題である。

言うまでもなく、そうした状態から立ち直り、自らを解放していく主体は子どもや若者自身なのであり、周囲の親や教師、カウンセラーや援助者はそれを手伝う脇役でしかない。その援助の仕事は、調子の悪くなったテレビを直すような仕事ではない。テレビを直す仕事では、直す主体は人間であり、テレビは直される受け身の客体でしかない。不登校やひきこもりの場合は、「直す」主体はその当人である。その認識を欠いた押しつけがましい一方的な「援助」がいかに侵襲的に子どもや若者たちを追い込んでいくかという例を筆者はいやというほど見てきた。

当人が自分で自分を「直して」いく主体になろうとするときに、もっとも障害になるのが「自己否定の心」である。多くの当事者の子どもや若者が、学校に行けない自分、社会に出られない自分を「ダメな奴」と責め、貶し、否定している。そのうえ親や教師の期待や「働かざるもの食うべからず」といった社会的規範に答えられない自分に「負い目」や「罪悪感」を感じている。このような彼らの自己否定は、「自分にはこういうダメなところがある」という部分否定ではない。「ダメな奴」「情けない奴」という風に、丸ごとの自分を責める自己否定なのである。

そのような自己否定にとらわれると「ダメな自分」をますます人前に出せなくなり一層社会からひきこもることになる。「出て行かねばならない」と思いながら出ていけない葛藤の泥沼にはまり込んで身動きつかぬ自分を「どうしようもなくダメな奴」とさらに否定するという自己否定の悪循環に陥っていくことになる。そうすると、そういう自分をこの世から消したくもなってくる。

このような自己否定スパイラルに陥らないように注意を払い、さらに自己否定の心から彼らが自分を解放していけるように援助することが、援助の要諦である。こういう援助の要諦を見失わないように彼ら自身の内面の状態に目を据えようとする概念が筆者の「自分が自分であって大丈夫」という自己肯定感である。彼らの内面に「自分が自分であって大丈夫」という「安心基地」が築かれるように援助することを抜きにした取り組みは上滑りし、一層彼らを焦りや自己否定の心に追い込んでしまう危険性を秘めているのである。

今日の日本の子どもや若者が自分の能力・特性を他人と比較して「とてもよい」と評価できず、あるいは自分なりの基準で「これでよい」と評価できず、自分に対して誇りや自信をもてないという自己評価の低さがしばしば問題にされる。それも問題といえば問題でありえる。とくに教育現場ではそうであろう。しかしより深刻な問題は不登校の子どもや社会的ひきこもりの若者たちの陥る苦境に端的に示されるように、それが「自分など存在する値打ちもない」「自分などいない方がいい

い」という自己存在の否定にまで及んでいってしまうことである。

4. 今日の子ども・若者の問題を語るときのキーワード「自己肯定感」

今日の子どもや若者の主体形成の問題とかかわって、しばしば「自己肯定感」という言葉がキーワードとして用いられる。それはセルフ・エスティームの訳語として用いられる場合も少なくないが、概ね自己を価値ある存在として評価し尊重する感情として理解され、人権教育などの領域ではとくに重視されている。

しかし、「自己肯定感」という概念は必ずしも明確に規定されておらず、その言葉を使用する諸家によって込められる意味やニュアンスに違いがある。詳しくは別のところで検討しているのでそれを参照して欲しいが（高垣1999, 2004, 2008）、自己肯定感を自分の「いいところ」を評価して、自己を肯定するような意味で用いられていることもあるし、筆者のように、存在レベルで自己を肯定する意味で用いている場合もある。ここで指摘したいことはどれが正しい定義かということではない。この言葉にどのような意味を含ませることが、今日の子どもや若者の問題と深く切り結ぶうえで有効であるのかという問題である。

たとえば、ある教師は中学生の「職場体験」から得られる生徒たちの満足を働く人々との出会いや人間的交流、いままで出会ったことのない生身の人間とのふれあいから得られたものではなかったかと述べながら、「また、『自己効力感』が（『自己有用感』『自己効用感』とも言ったりするようですが）いわゆる『自己肯定感』につながるものだとすれば、他者の役にたつ、まんざらでもない自分に気づく機会を、日常の学校生活のなかでどうつくるか。その観点でこれまでの実践を見直してみることこそ必要でしょう」と指摘する（綿貫2006）。

ここにも「自己肯定感」という言葉がでてくる。しかも、それは「自己効力感」と結びついた形で使われている。「他人の役に立つ、まんざらでもない自分」の感覚。そういうニュアンスを含むものとして「自己肯定感」が語られる。教育の分野ではこういう語られ方は多いように思う。筆者はそれが間違っているとも思わない。今日の子どもの状況を見ると、そのような感覚を育てる教育実践が大事であると考え。ただし、今日の子どもや若者が陥っている苦境の本質をとらえようとすると、「自己肯定感」がこういう語られ方をするだけでは、不十分だと考える。

そこに、心理臨床の専門家と教育の専門家が向き合わなければならない問題のレベルの違いが反映されているように思う。心理臨床の専門家が向き合わなければならない相手が抱えている内面の問題はより深刻で、相手を援助するためにはそれだけ深く相手の内面に入り込まざるを得ない性質をもっている場合が多い。

筆者が語り続けてきた「自分が自分であって大丈夫」という規定は、存在レベルの肯定である。機能レベルの肯定ではない。「できる」とか、有能だとか、役立つとか立たないとか、そういうレベルのものではない。むしろ、そういうレベルで評価されることなしには「存在」が許されないかのような状況への批判を込めた自己肯定感なのである。

先の教師の言葉にひきつけられれば、「他人の役に立つ、まんざらでもない自分」に気づく以前に、自分が安心してそこに居られる、自分の存在そのものが承認され、受け容れられているという安心感を十分に味わうことが必要な人間がいるということである。その辺の事情を配慮しないで先のような意味での「自己肯定感」をもつことを期待し要求すると、「他人の役に立つまんざらでもない自分」であることから隔てられている人間を一層の「自己否定」に追い込むことになりかねない。

5. 何が問題か—現代社会と若者の尊厳—

先に述べたように、不登校や社会的ひきこもりの当事者との心理臨床的な関わりからみえてくる深刻な問題は、これから人生の主人公になってゆくべき人間が学校や社会から排除された状態に陥るということもさることながら、それによって彼らが自己存在の否定にまで追い込まれることがあるという問題である。

2008年2月に立命館大学を会場に開かれた「第3回社会的ひきこもり支援者全国実践交流会」での「現代社会と若者の尊厳」と題するシンポジウムにおいて、筆者は人間の尊厳とは存在そのものに価値を置くことだとして、以下のように提起した。

「社会にでて会社に入り働くことで、自分が役に立っているという『自己効力感』『自己有用感』を得ることは大切なことであるが、それにとらわれないことも大切だ。周囲の期待する必要に応えることによって、はじめて自分の存在が許されるかのような気持ちにとらわれる人、なにか『役に立つこと』をしていなければ自分の『居場所』がないかのような強迫観念に駆られている人をみれば、そのことがわかるだろう。

役に立って認められたり、誉められて『自己効力感』を得る以前に、自分という存在が周囲に承認されているという手応え、自分と共にいることによるこびを感じてもらえているという手応えを通じて得られる『自分が自分であって大丈夫だ』という自己肯定感をもつことがまず必要なのだ。それを欠く人間がたくさんいることを忘れないで欲しい。

それを欠く人間が社会に有用であることを通じて得られる『自己効力感』『自己有用感』を一面的に求められると、それは『自分など存在しない方がいいのではないか』という自己否定に追い込まれるリスクに身を晒すことになりかねない。そういう人々に触れる機会を多く持つ私のような心理臨床家が世の中に注意を喚起するために指摘すべきことはそういうことであろうし、またそれが責務であろうと思う。」

こうした提起を通して筆者が問題にしたかったことは、自分が有能さを示したり誰かの役に立ったりしなければ自分の存在価値がないかのように思い込み、存在レベルの自己否定にまで自分を追い込むような子どもや若者の内面のありようであり、そうした内面を構築している価値観や文化、またその背景にある社会構造なのである。

不登校や社会的ひきこもりは、人生や人間としての成熟の過程でのひとつの「つまづき」ではない。人間はそうしたつまづきに出会うことを通じて悩み、その悩みを通して自分とあらためて向

き合い、自分と問答し、自分の生きるべき道を見つけ出していく。その過程そのものが成熟への道程である。だから、その成熟への道を励まし、援助するためには、安心して自分と向き合い悩めるように援助し、支えてやる必要がある。

ある不登校の子どもは、娘の不登校という事態に遭遇してオロオロする母親にこう言った。「お母さんは私が学校に行けなくなって悩んでいるのをみて、後から悩みはじめたのでしょ。そのお母さんが私以上にオロオロしたら、私は安心して悩めないじゃないの」と。

この子に限らず、いま、多くの子どもや若者たちは「安心して悩む」ことができなくなっている。それどころか、「つまずいた自分」を「ダメな奴」と否定し、責め、貶し、自分を嫌うような心境にまで追い詰めていく。そのことを問題にしたいのである。

6. 人間として尊厳を傷つけるもの

先のような問題は、人間の尊厳をどうとらえ、人間の存在価値をどこに置くかという問題である。多くの不登校の子どもや社会的ひきこもりの若者が自分の存在価値を見失い、自分の存在そのものを否定する窮地に追い込まれている。筆者自身は人間の尊厳とは、自分の存在そのものに価値をおくことのできることであり、人間の尊厳に依拠する自尊心は、誰かの役に立つ「いいところ」があるからのもてる自尊心ではない。

だがしかし、いま多くの子どもや若者が自分の存在そのものに価値を置くことができなくなっている。「自分が自分であって大丈夫」と存在レベルで自己を肯定する安心感をもてなくなっている。

今日の若者を機械やモノのごとく扱い、使い捨てる労働環境が、若者達の自尊心を傷つけている。機械やモノはそれを使う人間にとって役に立つかどうかでその価値が決まる。もし機械やモノに意識があれば、オレは使用者の役に立っているのだということで自尊心を持つかもしれないが、それは人間の尊厳を表す自尊心ではない。人間の尊厳を示す自尊心をもつ若者は使用者の都合によって一方的に価値づけられるようなあり方に、傷つきはしないが怒りを覚えるであろう。

機械やモノは、それが使用者に役立つ機能を欠いていれば、無用の長物である。その機械やモノに期待される機能（能力、特性）に欠陥（ダメなところ）があれば、存在そのものが否定される（まるごとダメ）ものである。機械やモノに意識があれば、そのことによって深く自尊心が傷つくであろう。

若者が機械やモノのごとく扱われるところでは、若者は自分の部分への否定によってまるごとの自分が否定されるかのような経験をする。自分の存在そのものを否定されるような経験である。こうした経験は、もしその若者がまるごとの自分の存在そのものを承認され肯定される場（外的には「居場所」、内的には「自分が自分であって大丈夫」という自己肯定感）によって存在を支えられていなければ、致命的な自尊心の傷つきになる。

不登校の子どもや社会的ひきこもりの若者のもつ不安は、自分の存在そのものが否定される不安である。人間を機械やモノのごとく扱う労働現場で「お前はダメなヤツ」と否定されたとしても、

その意味するところは使用者にとって都合のよい機能に欠けるということではない。にもかかわらず、自分がまるごと否定されたかのように感じて自尊心が深く傷つくとすれば、それは彼が自分の存在と役立つ機能とを同一視しているからである。

つまり彼は、弱点もダメなところも含めてここに存在する自分を承認され、肯定される「居場所」や「自分が自分であって大丈夫」という自己肯定感を欠いているのであろう。

彼は、極度に失敗を恐れることになる。失敗は、一つの機能の失敗にとどまらず、自分の全存在の失敗ということになり、「あんたは失敗作」だというメッセージになるからだ。こうしたあり方は、今日の学校や労働現場に出ていくことを極度に恐れさせることになる。

7. 学校や社会の問題と子ども・若者の主体の側の問題

ここで問われていることは、学校や社会に出ていこうとする子どもや若者が、自分の部分的な能力・特性、人材としての自己の価値に自信を持ってないことによって、自己存在を否定されるのではないかという大きな不安を抱くという問題である。こうした感受性がどこから生じてくるのか、そのことが検討されなければならない。

今日のような競争社会における子育てや教育にみられるありふれた光景は、他の子どもと比べることによって、尻を叩くやり方である。比べて、優劣順位をつけることができるのは、人間の部分的な能力・特性でしかない。ある教科によい成績を取ることが「できる」能力は比べて順位をつけることができる。しかし、丸ごとの人間は比べて順位をつけることはできない。

競争原理に支配され、比べ癖のついた目で子どもとみていると、比べて優劣順位をつけることができる部分的な能力・特性しか目に入らなくなる。そのような目で子どもをみて「成績の悪いダメな奴」「学校に來れないダメな奴」「おとなしいダメな奴」という風に評価する。「成績が悪い」「学校に來れない」「おとなしい」などは、人間の部分的な特徴でしかない。その部分的な特徴によって、「ダメな奴」と丸ごと否定するような評価に陥っている。そうした評価はまさに「脅し」の評価だと言ってよい。

こうした「脅し」の評価を受けながら育つ子どもたちの内面に何が形成されるかが問われるのである。ひとつには、競争社会で勝ち残れる能力、特性を備えた「よい子」でないと、見捨てられるという不安であり、ふたつには、部分を否定されただけで、丸ごと否定されたように感じて傷つき、パニックを起こすような感受性である。

今日の教育現場では、字の間違いを指摘されただけで、パニックを起こすような子どもの現象を指摘する事例に事欠かない。自分の書いた一字に×をつけられただけで、丸ごとの自分に×つけられたかのように感じ、自尊心が傷つき、パニックを起こすのである。

ちょっとしたことで傷つき、パニックを起こす子どもや若者たちの現象をとらえて、彼らが豊かな社会のなかで甘やかされて育ってきており、他者に否定された経験に乏しいことをその原因として指摘する論者もいるが、筆者はそれは実態の一面しかとらえていないと考える。問題は育ちの過程で他者に否定される経験に遭遇しているかどうかにあるわけではない。

むしろ問題は、部分を否定されることによって、丸ごとの自分が否定されたかのように感じる感受性であり、どうしてそのような感受性が育つのかという問題である。そのような感受性が育つのは、新自由主義的な政策によって拍車をかけられる競争社会のなかで、人間が「人材」として商品化され、機会やモノのごとく性能・機能によって評価され、その評価の高低によって、人間の存在価値が測られるようなシステムと無関係ではない。

そうしてそのようなマクロシステムが、地域・家庭や学校という社会や共同体を支配し、その文化や価値観にまで影響を与え、子どもや若者たちに自己の存在そのものが無条件に承認され、肯定されるという暖かい関係を十分に経験させてやれていないことにこそ彼らの感受性をもたらした問題があると考えられる。

8. 存在レベルの「自己肯定感」を育む関係

赤ん坊が泣く。そのとき、わたしたちは、「うるさいから黙れ！」とは言わない。その「泣き」が何を意味しているのかを理解しようとし、また理解して「そうか、よし、よし、おしめが濡れたのか、よし、よし、いまおしめをかえてやるからな」という風に向き合う。その時、私たちは「小便などして、ほんまにダメなやつだ！」とはいわない。「よし、よし」だ。その「よし、よし」は「おまえはオシッコが出る立派な子だ」という評価の「よし、よし」ではない。「おしめが濡れたのだね、わかった、わかった」の「よし、よし」だし、「かまわないよ、大丈夫だよ」という「よしよし」だ。

それは相手の訴えをしっかりと受けとめ、理解したという「よし、よし」だし、それでいいのだよという赦しの「よし、よし」である。筆者の言う「自分が自分であって大丈夫」の自己肯定感の「肯定」はこの理解と赦しの「よし、よし」であって、評価の「よし」ではない。

理解と赦しの「よし、よし」は存在そのものを肯定する。迷惑を掛ける存在だけど、存在しているのだから。しかし、今日の新自由主義イデオロギーとセーフティネットを弛める規制緩和がまかり通る社会では迷惑を掛ける存在は否定される（上からの「自立自助」、「自己責任」のイデオロギー攻撃）。このような状況のなかで、教育や子育ては「よい子」でないと見捨てるぞという脅しのメッセージをバックに子どもや若者たちを駆りたてる様相を強くしている。訴えをしっかりと受けとめ理解し、「よし、よし」と赦す関係がどんどん失われていっている。

子どもがお腹が痛いと訴えても、「正露丸を飲んでおき」、子どもが頭が痛いと訴えても「バッファリンを飲んでおき」、「お腹も頭もいたいねん」と訴えても、「病気かもわからんなあ、医者行ってこい」で済ませてしまう。痛みに対しても薬と医者まかせ、自ら痛みに寄り添い、痛みに自ら手を当ててやる関係が失われている。

そのような関係のなかでは、痛みや苦しみは手っ取り早く取り去るべき「やっかいごと」のようにしか扱われない。そういう扱いを受けるなかでは、痛みや苦しみを訴えることは、相手に迷惑をかけることでしかない。だから、痛みや苦しみを訴えることに消極的になる。

痛みや苦しみを訴え、それを「お腹が痛いのか、よしよし」と受けとめ、手当をしてもらえ

係のなかで、子どもたちは、「自分が自分であって大丈夫」という安心感を得て、自分で自分に「よし、よし」ができる赦しと感情コントロールの力を獲得していくのである。

9. 内面に埋め込まれた「地雷」と平和を貫く援助の作法

今日の多くの子どもや若者たちの内面に、「見捨てられる不安」「自尊心の傷つきやすさ」という「地雷」が埋め込まれている。そして、その「地雷」が爆発してマスコミをにぎわすような事件を起こしている。

筆者にはそのような「地雷」を抱えて生きている子どもや若者たちの心が「平和」からほど遠いことを思う。不登校の子どもや社会的ひきもこりの若者たちの心には、現在の学校や社会が、「地雷原」のように映っているのではないかと思う。いつ、相互の「地雷」を踏んで、加害者・被害者になるかもしれない場である。それは長年この問題に心理臨床の立場から向き合ってきた筆者の比喩的・イメージ的な心象風景である。

ある不登校の15歳の少年は、「子どもサミット」という不登校経験者の子どもや若者が市民に向かって自らの経験や想いを語る集会のなかで、「僕たちは不登校という形で、自分の辛さを表現できている。同じような辛さを抱えながら、それを表現できずに学校に我慢して通っている子どもたちがいっぱいいる。その子どもたちのことを気にかけてあげてください」と語った。筆者はその場の司会役をしていたのであるが、この少年の言葉の確かさに心打たれたことを記憶している。

筆者は自分の心理臨床実践を、子どもや若者の心に抱えた「地雷」を爆発しないように処理する「地雷処理班」のような仕事に限定することを望んではいない。そうではなく、「『よい子』でないと見捨てるぞ」という脅しに支配された関係を、ありのままの子どもや若者を承認できる関係に組みかえていくことを援助し、そういう関係のなかで、子どもや若者たちのなかに「自分が自分であって大丈夫」という自己肯定感が膨らんでくるように援助することをめざしている。それを支えられるような「居場所」や人間のネットワークを形成し、それを広げていくことを通して、「地雷」を埋め込まない共同体や社会を構築していくことをめざしたいと考えている。

そのような心理臨床実践は、教師や親、精神保健福祉士やソーシャルワーカー、その他の関係領域の援助者・専門家とのつながりのなかで実現する取り組みに当然なるだろうし、その援助の作法は、けっして人間を「脅し」によって支配しないという、平和と民主主義を貫くようなものでなければならぬと強く思っている。

文献

- (1) 高垣忠一郎「自己肯定感」を育むーその意味と意義(八木・梅田編『いま人権教育を問う』所収第3章・大月書店 1999)
- (2) 高垣忠一郎『生きることと自己肯定感』新日本出版社 2004
- (3) 高垣忠一郎『自己肯定感って、なんやろう?』かもがわ出版 2008
- (3) 綿貫公平「私たちの進路指導、進路教育の創造を」(進路教育 N0171 2006 秋季号 所収 p31)

〔資料〕

高垣忠一郎教授 略歴と業績

1. 略 歴

1944年 3月 7日	高知に生まれる
1962年 3月	大阪府立清水谷高等学校卒業
1968年 3月	京都大学教育学部卒業
1970年 3月	京都大学大学院教育学研究科修士課程修了
1973年 3月	京都大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学
1973年 4月	京都大学教育学部助手
1976年 4月	大阪電気通信大学工学部講師
1979年 4月	大阪電気通信大学工学部助教授
1985年 4月	大阪電気通信大学工学部教授
1995年 4月	立命館大学産業社会学部教授
2001年 4月	立命館大学大学院応用人間科学研究科教授
2009年 3月	立命館大学定年退職，同年 4月より特別任用教授

(主な学内役職歴)

1997年 4月～2003年 3月	教職センター長
2003年 4月～2007年 3月	応用人間科学研究科長

2. 専門分野 人文科学

研究課題 心の発達と病理および心理療法

所属学会 日本生活指導学会，日本心理学会，日本心理臨床学会 他

3. 主な研究業績

著 書

- 1) (単著)『思春期の心理』(あゆみ出版) 1985年 6月
- 2) (単著)『揺れつ戻りつ思春期の峠』(新日本出版) 1991年 4月
- 3) (単著)『登校拒否・不登校をめぐって』(青木書店) 1991年 7月
- 4) (共著)『21世紀をになう子どもたち』(法政出版) 1992年11月
- 5) (単著)『大事な忘れもの—登校拒否のはなし』(法政出版) 1994年 8月
- 6) (共著)『心の視点—カウンセリング・トレーニング—』(青木書店) 1997年 1月

- 7) (単著)『子どもの心を聴く』(法政出版)1998年5月
- 8) (単著)『揺れる子どもの心と発達』(かもがわ出版)1998年8月
- 9) (単著)『心の浮き輪のさがし方—子ども再生の心理学』(柏書房)1999年2月
- 10) (単著)『共に待つ心たち—登校拒否・ひきこもりを語る—』(かもがわ出版)2002年1月
- 11) (単著)『癌をかかえてガンガーへ』(三学出版)2002年12月
- 12) (共著)『不登校支援ネットワーク』(かもがわ出版)2004年1月
- 13) (単著)『生きることと自己肯定感』(新日本出版)2004年7月
- 14) (単著)『競争社会に向き合う自己肯定感』(新日本出版)2008年6月
- 15) (単著)『自己肯定感って、なんやろう?』(かもがわ出版)2008年8月

論 文

- 1) (単著)「現代非行の特質と学力問題」(『現代と思想』37巻, 青木書店)1979年9月
- 2) (単著)「今日の子ども・青年の問題現象をどう理解するか」(『生活指導研究』1号, 明治図書出版)1984年8月
- 3) (単著)「試験観察になったある中学生の事例」(『生活指導研究』3号, 明治図書出版)1986年8月
- 4) (単著)「治療と教育—「受容」と「指導」」(『生活指導研究』4号, 明治図書出版)1987年10月
- 5) (単著)「登校拒否とはなにか—なにが問題か」(『教育』No.514, 国土社)1988年5月
- 6) (単著)「今日の青年の自己形成について」(『日本の科学者』24巻1号, 日本科学者会議)1989年1月
- 7) (単著)「学校教育とカウンセリング」(『教育』No.526, 国土社)1990年5月
- 8) (単著)「登校拒否と子育て」(『季刊保育問題研究』No.143, 国土社)1993年10月
- 9) (単著)「子どもの個性と自己肯定感」(『教育』No.572, 国土社)1994年3月
- 10) (単著)「人づきあいの心理学」(『現代と保育』No.35, ひとなる書房)1995年2月
- 11) (単著)「心で関わる生徒指導」(『学校教育相談』, ほんの森出版)1999年1月
- 12) (単著)「今日の子どもをどう理解し, どう受けとめるか」(『どの子ものびる』, たかの書房)1999年5月
- 13) (単著)『『荒れる』子どもをどうみるか』(『生活教育』6月号, 星林社)1999年6月
- 14) (単著)「子どもたちの「荒れ」の「意味」を考える」(『教育』No.662, 国土社)2001年3月
- 15) (単著)「今日の社会と心理臨床(カウンセリング)の役割」(『立命館人間科学研究』No.1, 立命館大学人間科学研究所)2001年4月
- 16) 「不登校(登校拒否)問題—どうとらえどう取り組むか」(『人間らしく生きる福祉学』75-83頁, ミネルヴァ書房)2005年4月

- 17) (単著)「近年の少年犯罪の背後にひそむものについての一考察」(『生活指導研究22号』32-45頁, エイデル研究所) 2005年10月
- 18) (単著)「『自己愛』と『自己肯定感』から考える子育てにおける『平和』と『暴力』」(『心理科学』第26巻第2号, 心理科学研究会) 2006年11月
- 19) (単著)「思春期の「第二の誕生」を困難にするもの—「不登校・ひきこもり」をめぐって—」(『教育』No.743, 国土社) 2007年12月

4. その他の社会活動

登校拒否・不登校問題全国連絡会世話人代表
社会的ひきこもり支援連絡会議呼びかけ人 など